

# 「問い」から始まる哲学対話

哲学者  
ながい れい  
**永井 玲衣**

学校・企業・寺社・美術館・自治体などで、人びとと考える場である哲学対話を幅広く行っている。Gotch主催のムーブメント「D2021」などでも活動。著書に『水中の哲学者たち』（晶文社）。連載に「世界の適切な保存」（群像）、「ねそべるてつがく」（OHTABOOKSTAND）、「これがそうなのか」（小説すばる）、「問いでつながる」（Re:Ron）など。第17回「わたくし、つまりNobody賞」受賞。



10年ほど前から、「哲学対話」を続けています。哲学科のある大学を選び、大学院でも哲学を研究してきましたが、現在はどこにも所属せず、フリーの立場で研究や執筆を続けながら、週5回くらい、学校をはじめ企業や美術館、自治体などさまざまな場所で哲学対話を行っています。

日本で哲学対話が行われるようになったのは比較的新しく、2000年ころです。とりわけ2011年の東日本大震災の後、盛んになったともいわれます。源流はフランスの哲学者マルク・ソーテ（1947―98）がはじめた草の根の討論会である「哲学カフェ」

ですが、アメリカの学校から世界に広まった教育法「P4C（Philosophy for Children）」という流れもあり、日本の学校でもこれを実践するところが増えていきます。

## 誰もがすでに、哲学している

哲学は「難しいもの」と思われるかもしれませんが。でも私は小学一年生からお年寄りまで、あらゆる世代のあらゆる人と哲学対話をしてきました。「私たちは日々、すでもう哲学をしている」という前提のもとに実践をしています。

哲学対話を学校で行う場合は、少人数のグループに分かれることもあれば、私ひとりがファシリテーター（進行役）としてクラス全員で行うこともあります。人数や形式は集まった人の関係性や場の特性によっても異なりますが、ふだんの授業とはちがう非日常の時間をデザイン・演出できるような形を先生たちと相談します。

もうひとつ大切に行っているのは、自分たちが立てた問いについて考えてもらうこと。教科や単元などに合わせたテーマを設定することもありますが、それについてふだんモヤモヤしたり、不思議に思っていたりするものはありますか？などと質問します。「なぜ健康に悪いものが食べたくなくなる？」「ウンコって言うとなぜ友だちに嫌がられる？」「友だちってどうしても必要？」など、問いが出はじめると、子どもたちは、もう止まりません。た

たとえば「校則は必要？」といった「不適切」とされてしまう問いも出ますが、それも重要な問いです。逆に、ふだん問うべきではないと思われる問いを、実はみなさんたくさん持っているのです。

たしか、小学二年生でした。「正しくないことは、悪いことなの？」と言いました。哲学者としても感動してしまう。そんな問いのなかから、テーマは参加者に多数決で決めてもらうことが多いです。

## よく聞くことの大切さ、むずかしさ

哲学対話は、「よく聞くこと」、「自分の言葉で話すこと」、そして「人それぞれでしよ」で終わらせない。この3つを「お約束」として伝えます。特に「よく聞くこと」は、大人にとってもすぐくむずかしい。ですから、今日はよく聞き合うことができた素晴らしい対話でしたね、などということを目指しているわけではありません。できないかもしれないけど、やってみよう、そう試みることで自分が対話のだと最近思うようになりました。わざと嫌がりそうなことを言って大人を試すような子は、もちろんいます。そんなときも、「それってどういうこと？」と質問するなど、よく聞く姿勢を見せることも大切です。一方でみんなが賛成してくれそうな「よいこと」「正しいこと」を言い合おうとして話が収斂してしまうこともあります。そんなときは私自身がひとりの参加者として、たとえば



福島県浪江町立なみえ創成小学校  
での哲学対話は、5年続けている。  
車座の哲学対話はいつも活発だ。  
撮影=saki yagi

「では、思いやりはとにかく大切ということ  
で本当にいいですか？」などと質問します。  
すると、「あ、そっちの方向も話していいん  
だ」と再び対話が勢いづくものです。

### 夢中で哲学対話が続ける子どもたち

問いを出してもらい、対話する。哲学対話  
はそれだけです。時間がきたらおしまい。今  
日はこんなことを話しましたねとか、結論づ  
けたり、流れを振り返ったりはしません。  
子どもたちからは、「え、もう終わり？ な  
んで終わるの？」の声。答えのないことが不  
満なのではなく、ただ対話が楽しくて夢中な  
のです。休み時間になっても大人をつかまえ、  
続きをしたがる子もいます。いつも授業で発  
言の少ない子がたくさんしゃべったり、その

もカリキュラムに追われている先生を解放す  
る時間でもあるのです。

### 世界がわからなすぎて

高校生の女の子から、「考えるっていうこ  
とがあると教えてくれて、ありがとう」と言  
われて衝撃を受けました。それほど自分で考  
え、それを表現する場が今の社会にはないと  
いうことだと痛感しました。でも実は、私自  
身もそうだったと思いますのです。

私は高校生の頃、世界も、なにかもがわ  
からなすぎて、いつもイライラしていました。  
でも、本を読むのは好きで、図書館で世界文  
学全集を借り、不条理文学と呼ばれるような  
作品を好んで読みました。そんなときサルトル  
の「人生に意味を与えるのは諸君の仕事で  
あり、価値とは諸君の選ぶこの意味以外のも  
のではない<sup>\*</sup>」という言葉に出会いました。  
はじめて「自分で考え、問いを投げかけてい  
んだよ」と言われた気がしました。

逆もあつたり。そんな子  
どもたちの様子に、先生  
たちも驚かれます。  
私はそんな先生にも、  
対話に加わってもらうの  
が好きです。子どもの発  
想や言葉が面白いといわ  
れますが、大人もとても  
面白い。「え、こうかな？  
あ、わからない！」など  
と大人が必死で考えはじ  
めると、子どもたちも盛  
り上がります。哲学対話  
は子どもだけでなく、いつ

それで哲学や対話が好きになったのかとい  
うと、実は少し違います。私は人と話すこと  
が苦手。はじめて哲学対話に参加したときの  
印象も、すごく悪かった。めちゃくちゃ緊張  
するし、対話しようとしてもお互い相手の話  
をろくに聞かないし……。今も苦手意識はあ  
ります。対話ってすごく大変。でも日々のコ  
ミュニケーションにも同じことが言えるし、  
私たちのそういうあり方に興味を湧いてきて、  
もっと探求してみたくなったのです。

### 人と人をつなぐ問いを育てていく

ふだんの授業に哲学対話を取り入れている  
学校もあります。「ミニ哲」と呼び、たとえ  
ば公民の授業の最後の15分で「今、調べても  
すぐにはわからないような問いはある？」と  
いうような聞き方をします。「憲法に何が書  
いてある？」は調べればわかりますが、「な  
ぜ政治の話はしづらいの？」だと、すぐには  
わからない。「あなたはどうか考える？」を問  
うことにもなります。答えはなくてもよいし、  
無理に授業内容と合わせなくてもよいのです。  
問いは育てるものです。モヤとした思い  
を言葉にして、こうじゃない、ああじゃない  
と話し合うことで、問いが採まれていく。

人の「悩み」は、個別化されています。「他  
人にどう見られるか悩んでいます」と言った  
ら、どう解決するか、という話になりがちで  
す。でも、「なぜ人に見られることが気になる  
の？」と哲学的に問えば、それは「みんな  
の問い」になる。話し合い、さまざまな角度  
から焦点を当てられることで、問いは、バラ  
バラな私たちをつなげるものになります。

そういう場所と時間が学校をはじめ、もつ  
とこの社会のなかにあつてほしい。嫌いな人、  
理解できない人もいるなかで一緒に考えを深  
めていく対話は、社会そのものです。私がみ  
なさんとともにやっているこの小さな「場づ  
くり」は、社会を変えていく一歩でもあると  
考えています。